

「コツコツ積み立て」は年金不足への最強の備え

10年以上先の資金を準備する場合、その第一歩は積み立てることです。お金が貯まる家計は、一般的傾向として「積み立て」を重視し、日常生活の中に組み入れています。成功している家計の特徴を3点見ていきましょう。

■お金が貯まる家計の行動

まず、「収入（給料）－貯蓄（積み立て）＝支出（生活費）」といった考え方でお金を貯めていることです。結果的に残ったお金を貯めようとする考え方やめて、最初に貯蓄を取り分け「積み立て」を行います。

2点目は、少額でも長くコツコツ「積み立て」を続けていることです。最初がんばって多額の「積み立て」を開始しても、その後に無理が祟り「積み立て」額を減らすと、しだいに「貯める気力」を失う事例も少なくありません。最初からの無理は禁物です。

3点目は、貯めていることを特に意識しない金融商品を選んでいることです。給与天引きや口座引き落としにより自動的に貯まる仕組みの活用がポイントとなります。

■リスク許容度を勘案した商品選択

積立商品には、財形貯蓄、積立定期預金、個人型確定拠出年金（iDeCo）、投信積立、つみたてNISAなど、さまざまなものがあります。こうした中から商品選択するとなると、リスク許容度と税制優遇メリットの活用が鍵を握ります。

まず、リスク許容度ですが、収益がマイナスに振れた場合、どれくらいの額までなら、マイナスを受け入れることができるかを掴むことです。50歳以前であれば運用期間は長く取れ、比較的高いリスクにも耐えられるでしょう。50歳以降になりますと、損失が生じた場合に挽回することが難しくなります。仮に損失が生じて、それを取り戻そうと焦り、高いリスクの投資を続けると、さらに損失を膨らませることにもなりかねません。その他にもリスク許容度を左右する要素として、家族構成、保有資産の状況などがあります。

■税制優遇メリットの活用

老後資金にも使える税制優遇制度が相次いで登場しています。2014年のNISA創設以来、2017年の個人型確定拠出年金の加入対象者の拡大、そして2018年からは「つみたてNISA」が始まりました。各制度には、投資対象商品や税制優遇の内容、60歳以前の引き出しの可否などが異なり、一長一短があります。